

テレビ暴力に関する実証的研究の概観

佐々木 輝美

1 はじめに

現在、テレビ暴力視聴と視聴者の暴力的傾向との間に正の関係があるだろうということについては、多くの人々が認めるところである。しかし、その影響のプロセスについて明確な説明は行なわれていない。このことは、そのまま過去のテレビ暴力研究経過を反映している。つまり、今までのテレビ暴力研究は、暴力シーンを視聴すれば、人々は暴力的傾向を持つようになるという因果関係についての実証的データを集めることに主眼がおかれ、どのようなメカニズムによってそうなるのかの研究をするまでに至っていなかったのである。

そこで本稿では、テレビ暴力が視聴者に悪影響を与えるプロセスに関する主な4つの理論について述べる。以下に、テレビ暴力を定義した上で、1) カタルシス理論、2) 観察学習理論、3) 脱感作理論、4) 文化化理論のそれぞれについて主な実証的研究を概観し、テレビ暴力研究の今後の課題について検討したい。

2 テレビ暴力とは

我々は、よく暴力という言葉を使うが、何が暴力かという問題になると明確に答えることは難しく、またその定義も様々である。そこで、「暴力」及び「テレビ暴力」を定義する必要がある。

(1) 暴力とは

「暴力 (Violence)」と共によく使われる語に「攻撃性 (Aggression)」があり、両者は同義語としてとらえられることもある。事実、宇津木は Dollard ら (1939) の *Frustration and Aggression* を翻訳した際、そのタイトルを「欲求不満と暴力」と訳している。しかし、厳密には両者は同一ではないと考えられる。「あの人は暴力的だ」とか、「あの人は攻撃的だ」と言うことはできる。しかし、「あの番組は暴力的だ」と言っても、「あの番組は攻撃的だ」とは言えない。「攻撃性」は、人間の特性についての表現であり、精神分析用語辞典 (みすず書房) は「攻撃性」を以下のように定義している。

他人を傷つけ、危害を加え、強制し、辱めるといった行動を、現実的ないしは幻想的な様式で実現する傾向あるいはこれら諸傾向の総体を言う。攻撃には暴力的、破壊的な運動行為とは異なった様相が認めらる。すなわち消極的でも (たとえば援助の拒否)、積極的、象徴的でも (たとえば皮肉)、攻撃として機能しうる行動様式が存在する。(以下略)

この定義によれば、「暴力」は「攻撃性」という人間の傾向が表面化した事象の一部としてとらえられよう。「攻撃性」は、もともと心理学の領域で使われる用語であり、人間の本能との関連においても研究されているが、テレビ暴力研究に関しては、テレビで描写し易いあらわな攻撃行動を意味していると考えられ、それらの行為は頻繁に「暴力」として表現される。このように、「暴力」と「攻撃」は厳密には同一ではないにしろ、中西 (1970) が、「『暴力』という用語は、もっと広く解釈すれば『攻撃』という心理学上の用語におきかえられる」(p.1) と述べているように、「暴力」は基本的に「攻撃」という概念に基づいている。そこで、本稿で使用する「暴力」、及び「攻撃」という言葉は、断わりのない限り同義とし、その定義について以下に述べる。

Dollard ら (1939) は、「フラストレーション——攻撃仮説」に基づき、

暴力を「相手に対して、危害を加えるたの、目標反応」(p.11)と定義した。しかし、この定義によると「他人を傷つけるための行為」しか暴力とみなされず、他の目的(例えば、欲しい物を得る目的)で他人を傷つける行為は暴力でないことになる。そこで、Berkowitz (1965, p.303) や Feshbach (1970, p.161) は、Dollard の、いわゆる「敵意ある暴力」の他に、「道具的暴力」を付け加えた。つまり、物や地位などを得るため、または人を服従させるための手段としての暴力である。

しかし、以上の定義は人間に関してであり、破壊行為などの、物に対する暴力については触れていない。そこで、Bandura (1973) は「暴力」を、「人を、物理的、心理的に傷つけたり、物をこわしたりする行為」(p.5)と定義づけた。さらに、Belson (1978) は「間接的に、人や物にダメージを与えることが十分予想される場合(例えば、グラウンドに割れたびんを故意に置く場合など)も暴力行為」(p.191)とみなしている。

以上の定義を総合し、ここでは暴力を次のように定義する。

「生物、または無生物の対象に、物理的、心理的危害を直接的、間接的に与える行為」

(2) テレビ暴力とは

一般に、「テレビ暴力」という場合、暴力シーンを問題にするか、暴力シーンを含む番組を問題にするかの2つが考えられる。しかし、暴力描写はあくまでもある脈絡の中で描かれるものであり、実際にテレビ暴力という場合、暴力番組が問題にされる場合が多いので、ここではテレビ暴力番組として捉える。Gerbner ら (1980) は、「暴力」を以下のように定義づけ、これらにあてはまる行為の描写をテレビにおける暴力としている。

(武器の有無にかかわらず、また、対象が自分であれ他人であれ) 対象となる者の意志に反して、傷つけたり殺したりすることによる苦痛、または、そのようなことをするというおどしによって、ある人に、ある行動を強いること。この中には、遊び的なおどし、言葉

による攻撃，暴力的な結果を生じるとは限らない行為は除くが，偶然による暴力，および自然による暴力は含む。(p.11)。

さらに，Gerbner ら (1976) は「番組」を

「ドラマの形で描かれる一片の虚構的物語で，これにはテレビ用に作成された劇，長編特作テレビ放送，及びマンガの物語も入る」
(p.184-5)

と定義している。しかし，これらの定義に従うと Comstock ら (1978) も述べているように，「もし，偶発的，自然現象的暴力が含まれるとしたら，ある種の番組も不当に暴力番組にされてしまう」(p.65) ので，今後，暴力番組規準はさらに改善の余地があると言える。

このように，どのような番組を暴力番組とするかについては，現在のところ明確な規準はなく，Milavsky ら (1982) が述べているように，「ある番組が暴力的かどうかは，様々の視聴者に，その番組が暴力的と思われるかどうかを聞くことによって決められている」(p.78) 場合も多い。

以上を参考にし，本稿での「テレビ暴力」を以下のように定義する。

「テレビ用に作成された劇，長編映画，マンガを含む，ドラマの形で描かれる一片の虚構物語番組で，生物，または無生物の対象に，物理的，心理的危険を直接的，間接的に与える行為の描写を含むもの」

3 テレビ暴力に関する実証的研究の系譜

(1) カタルシス理論

a. カタルシスの意味

カタルシスという語はもともと浄化，解除を意味するギリシャ語である。アリストテレスは，「悲劇は，いたましさとおそれを通じて，このような諸感情の浄化を達成するものである」と述べ，悲劇が観衆に及ぼす影響を述べるときにこの言葉を用いた。社会学小辞典（有斐閣）によれば「劇的感動によって心が清められ，せいせいした気分になること」を言う。DeFleur ら

(1975) は、テレビ暴力に関するカタルシス効果を、「人々は日常生活において、フラストレーションを持つものであり、それが原因となって攻撃行動が生じるが、カタルシス効果とは、他人の攻撃行動に代理参加することによって、そのようなフラストレーションを解消すること」(p.221) と説明している。つまり、暴力的なテレビ番組を見ることによって、視聴者は代理的な攻撃経験をし、自分たちの敵対的・攻撃的感情を、誰をも傷つけることなく和らげることが可能となる。

b. カタルシス理論をめぐる諸研究

Feshbach はカタルシス理論の主な提唱者であるが、他にも多くの研究者がこの理論に関する研究を行ってきた。現在では、カタルシス理論を支持する研究者はほとんどなく、この理論を支持する証拠も乏しい。しかし、過去のカタルシス研究がテレビ暴力研究に与えた影響を無視することはできない。以下に、カタルシス理論の是非をめぐる行なわれ、後のテレビ暴力研究に貢献したと思われる主な研究について概観する。

Feshbach (1955) は、初期のカタルシス研究で、欲求不満を持った学生が、物語を書くことによって欲求不満を解消したと報告した。この研究では、まず、被験者である学生たちは侮辱され欲求不満を起こさせられた。その後、一方の群はTAT検査を用いて物語を書かせられ、欲求不満を晴らす機会を与えられた。他の群は、TATのかわりに適正検査を受けさせられた。その結果は、適正検査を受けた群よりもTAT検査を受けた群の攻撃水準の方が統計的に有意に低かったというものであった。この研究は、代理活動としてのテレビ暴力視聴は行なわれていないが、物語を書くという行為によって攻撃性が発散させられるという証拠となっている。

Siegel (1956) は、「カタルシス理論はマス・メディア暴力の効果を評価する際の一般に認められた有用な理論だが、その理論の支持・不支持に関する証拠に欠ける」(p.365) とし、自らカタルシス理論の実験を行った。Siegel は同一被験者(3~5歳の保育園児)について、暴力映画視聴後および非暴力映画視聴後の遊び行動を比較した。それぞれの映画は順に、2回

のセッション中に子供たちに別々に見せられ、セッションの間には1週間の時間を置いた。子供たちの攻撃的動因は一定にされ、子供たちは同じ保育園の同性のパートナーとペアーを組み、セッションに参加した。それぞれの映画を見終えた後、ペアーの子供たちは14分間遊び部屋に二人きりにされ、彼らの遊びは、攻撃度、不安度、及び罪の意識を表わす行動の観点からマジックミラーを通じて評定された。その結果、暴力視聴と非暴力視聴の間に有意な差はなく、暴力映画を視聴した後では、攻撃行動はむしろ多くなることが示された。

その後、Feshbachが1961年に行なった研究では、代理活動として暴力映画（“Body and Soul”という映画にあるボクシングの試合のシーン）視聴が行なわれた。実験の手続は、前出の1955年に行なった研究とほぼ同じである。結果は、やはり中性的な映画を見た群より、暴力的な映画を見た群の方が攻撃性が少ないというものであった。

ここで、Siegel 及び Feshbach の研究で使われた暴力映画の内容について比較することは、今後の研究に示唆するものがあると思われる。Siegel の研究では、ウッドペッカーというマンガ番組から抜粋された暴力シーンが使われたが、Feshbach の研究で使われたものはボクシングの試合である。このような、提示刺激内容のちがいが両者の研究結果のちがいに影響したことは十分予想できることであり、刺激内容の類型化の必要性を示唆するものとしてとらえられよう。

Feshbach と Singer (1971) は、初めて、実験的方法を自然状況におけるテレビ暴力研究に適用した。彼らは、少年たちに暴力テレビ（アンタッチャブルなど）か中性のテレビ（名犬ラッシーなど）を1週間に少なくとも6時間見せ、これを6週間続けた。その間、少年たちの行動が、彼らをよく知っている教師らによって記録された。その結果、この期間中に暴力テレビを見た少年たちの方が、中性テレビを見た少年たちより攻撃的でなくなる傾向が見られた。

この研究結果もカタルシス理論を支持するものとしてしばしば引用される

が、Eysenck ら (1978) は、「中性テレビ群の少年たちは、番組を特に熱心に見たわけではないし、その選択を制限されたことに不満を持った。この不満が攻撃の形で表現されたのかも知れない」(p.126) と述べ、いわゆる、フィールド実験研究につきものの限界があったことを指摘した。また評価の仕方にも問題があったと言える。教師たちは少年たちのことを普段から良く知っているので、評定に際しても普段彼らが各少年に対して持っている態度が影響したことは十分考えられる。これらを考え合わせると、必ずしもこの研究結果がカタルシス理論を支持する有力な証拠とは言い難いというのが一般的な見方である。

一方、Geen と Quanty (1977) はカタルシス理論について心理生理学 (psycho physiology) の立場から、過去の研究を含めての包括的な結論の提出を試みた。彼らは、「心理生理学的な研究では、喚起 (arousal) を心拍活動で量化して測定した場合、攻撃行動に参加することによって喚起を減少させることができる」(p.33) と述べている。しかし、同様の事を、自律神経回復という観点からみると、攻撃行動をすることによるカタルシス効果はあいまいであり、以下の3つの状況においては、攻撃行動に参加しても、少なくとも自律神経の回復は見られないと指摘している。

- 1) 攻撃の相手が攻撃者より高い社会的地位にある場合
- 2) 攻撃行動が、与えられた状況には明らかに不適當な場合
- 3) 本人が暴力的にふるまうことに罪の意識を持つ傾向のある場合

これらを一言で言えば、攻撃行動に不安を感じる場合には、カタルシス効果はないことになる。Geen は今の段階では、カタルシス効果は確認できないことを述べ、カタルシスを支持する過去の証拠に関しても、実験の手續において、例えば、暴力に対する制止が為されたかどうかという観点からの再解釈が必要だと指摘している。

以上のように、カタルシス理論は魅力的で注目される割に、その理論を支持する証拠は少ない。Eysenck と Nias (1978) は、「テレビ暴力がどのような効果を持つにしろ、人々の攻撃性を減少させるよりは増加させることは

ほとんど確実である」(p.133) とさえ指摘している。

(2) 観察学習理論

a. 観察学習のプロセス

人々は、生まれもって犯罪や暴力行為を行なう訳ではなく、それらの行為をどこかで学ぶのである。テレビ暴力における観察学習理論は、一般に子供たちが親、兄弟、友人を真似て様々な行動を学ぶと同様、テレビで見たモデルの暴力行為も学習し、ある状況においては学習した暴力行為を実行するという立場を取っている。

Liebert (1972) は、観察学習のプロセスを 1) 刺激接触, 2) 習得, 3) 受諾の 3 段階に分けて図式化した (図 1)。

第 3 段階の受諾に関しては、以下のように、A. 模倣効果, B. 反模倣効果, C. 模倣しない (無効化) の 3 つの効果を想定し、さらに A, B に関しては直接模倣と間接模倣 (同類行為の模倣) に分けている。

A. 模倣効果

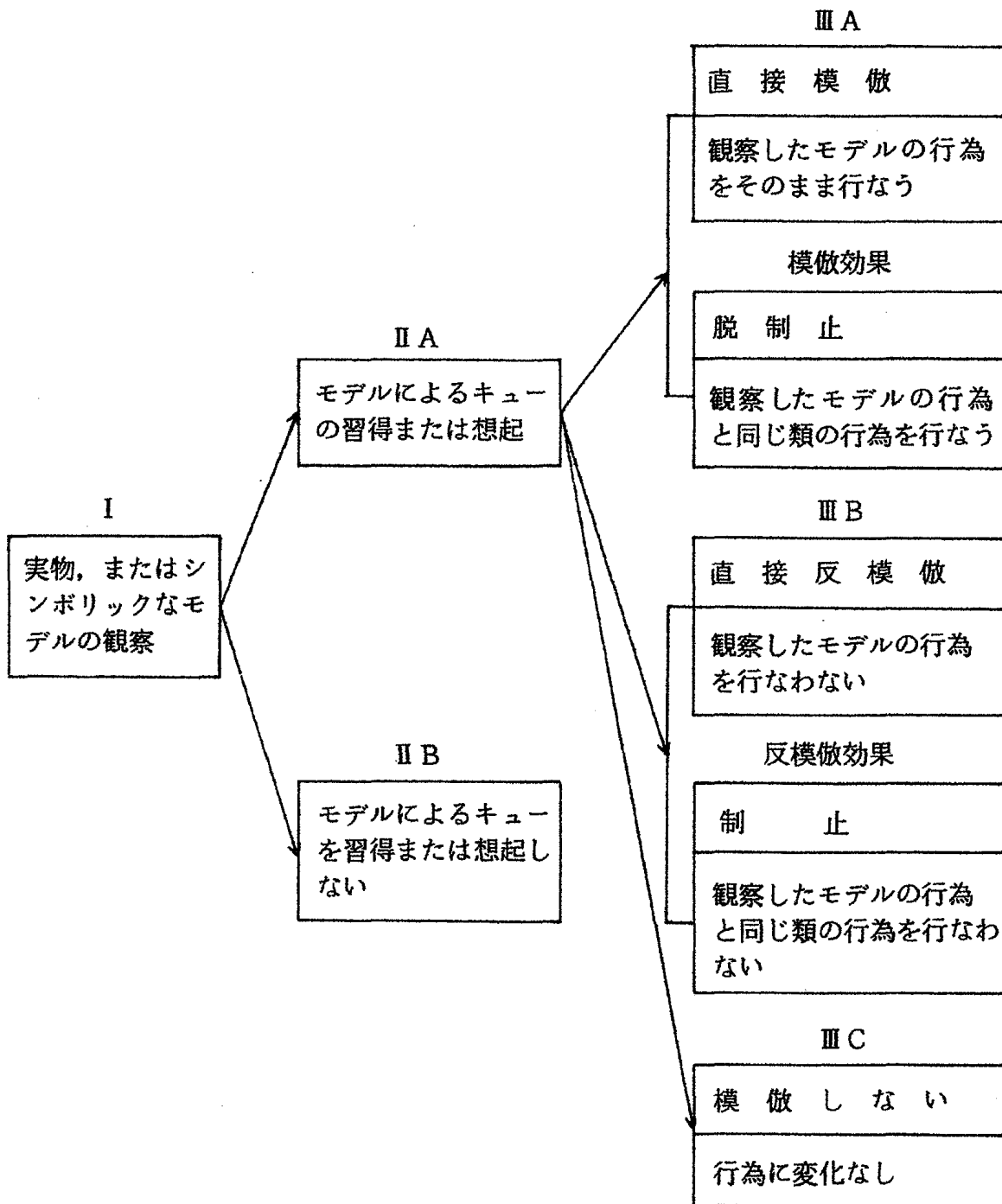
1. 直接模倣……観察した行為をそのまま真似る
2. 脱制止……観察した行為をそのまま真似ることはしないが、観察した行為と同じカテゴリーに入る行動をする

B. 反模倣効果

1. 直接反模倣……観察した行為の真似をしなくなる
2. 制止……観察した行為と同じカテゴリーに入る行動をしなくなる

- C. 模倣しない……A, B においては、あることを観察することによって、行動になんらかの変化が生じたが、ここでは何の変化も生じない (無効果)

このモデルは、観察学習のプロセスを理解する上でわかりやすく有用であるが、1 つの難点は、ⅡからⅢに移る際の媒介要因の存在を考慮していないことであり、この媒介要因によって効果があつたりなかつたりなかつたりす



刺激に接触 -----> 習得 -----> 受諾
 モデルの行為の再現を要求された時に、それができかどうかで測定される
 その人の自発的な行為かどうかで測定される

図1 観察学習の3段階
 (Liebert, 1972, p 5)

るので重要である。例えば、脱制止効果が生じるか、あるいは制止効果が生じるかの違いは、ある行為がほめられたのか、しかられたのかなどの違いによる。このように、ある行為の結果がどうなるかを知覚することの効果を検討すべきであろう。

b. 観察学習理論をめぐる諸研究

観察学習理論については、初期の実験室研究 (Bandura, Ross & Ross 1961, 1963a, 1963b) 以来、実験、フィールドの両面にわたって多くの研究が行なわれてきた。

Bandura ら (1963a) は、保育園児96名 (男48, 女48) を被験者として、同一暴力刺激が、生身の人間、映画、マンガのそれぞれによって示された場合、子供に与える影響に差があるかどうかを調べた。提示された暴力は、ボボ人形 (Bobo doll) を、1) なぐる、2) 上にまたがり顔面をなぐる、3) つちで頭をたたき、4) 空中に放ったり、部屋の中をけとばしてまわる、というものであった。子供たちは、モデルによるこれらの暴力シーンを見た後、ボボ人形やつちなどが置かれてある実験室に移され、一般的攻撃行動、模倣的攻撃行動などについて観察された。その結果、一般的攻撃行動については、統制群よりも3つの実験群のほうが有意に多く、模倣的攻撃行動については、生身の人間によるモデリングのほうが大きな影響を与えることがわかった。

この研究から、モデルが暴力行為を行なった時の賞罰の有無によって、模倣効果は影響されるのではないかと予想されたため、Bandura ら (1963b) はこの点について、保育園児80名 (男40, 女40) を被験者として実験を行なった。被験者は2群に分けられ、一方の群はモデルの暴力行為が罰を受け、他の群は暴力行為が報酬を受けるといった内容の映画を見せられた。その結果、後者は前者より有意に多くの模倣的暴力行為を示した。

さらに Bandura (1965) は、モデルの暴力行為の賞罰にかかわらず学習量は同じであり、実際にほうびを与えれば模倣的暴力行為の量に変化はないという仮説をたて、検証を試みた。Bandura は、ボボ人形に対する言語的・行動的に暴力的な描写を含む番組を3つ用意し、保育園児66名 (男33, 女33)

に視聴させた。第1の番組では、モデルが暴力的行為をした後、その行為が罰せられ、第2の番組では逆にほめられ、第3の番組ではほめられもしなければ、罰せられもしないというものであった。これらの番組を3つの群に見せ、反応を見たところ、第1の番組を見た子供よりも、第2、または、第3の番組を見た子供の方が多くの模倣的暴力を示した。さらに Bandura は被験者全員に、モデルの真似をすればほうびを与えると行って、暴力行為がどれ位学習されているかを調べたところ、どの番組を見たかにかかわらず学習の量に変化はないことが明らかになった。

Savitsky ら (1971) は、Bandura らによる一連の模倣効果に関する研究の追試を行なった。Savitsky らは、48人の小学1～2年生を被験者とし、9才の少年モデルが、道化役者に対しておもちゃのマシンガンで撃ち続けたり、つちで殴り続けるという内容の映画を見せた。その後、子供たちの遊び行動を観察した結果、模倣的暴力は増加することがわかった。

一方、Hanratty ら (1972) は、模倣的暴力とフラストレーションの関係を明らかにしようとした。Hanratty らは、6～7才の男子生徒30人を被験者とし、フラストレーションを起こさせた群と、そうでない群に暴力映画（内容は Savitsky らの使用したものと似ている）を視聴させ比較したところ、フラストレーションは模倣的暴力行動を増加させることがわかった。

以上の諸研究では、刺激内容はストーリー性に乏しい短いセグメントで構成され、日常的な条件とはかけはなれているが、Stein ら (1972) は、日常的な条件に近い暴力番組刺激を使用しフィールド実験を行なった。Stein らは、暴力番組、向社会番組、中性番組の3つの刺激を用意し、4週間にわたって被験者に視聴させた。暴力番組の内容は、それぞれ10分の長さで、2つのストーリーを持つマンガ・バットマンとマンガ・スーパーマンが6つに分けられたものであった。その結果、暴力番組はすでに暴力的傾向の高い子供の暴力行為に影響を与えることがわかったが、この研究ではむしろ子供たちの向社会行動に対する向社会番組の効果が大きく、暴力番組を視聴した子供よりも向社会番組を視聴した子供たちがの方がルールを守ったり、忍耐強くな

ることがわかった。

さまざまな研究の蓄積によって、テレビ暴力における観察学習理論研究は、どのような条件のもとに模倣的暴力は生じるかということに焦点が移っていった。こうした中でKniveton (1973) は、被験者の社会経済的地位、及びモデルの年齢と模倣的暴力の関係を明らかにしようとした。Kniveton は、5～6才の40人の少年を被験者とし、成人男子または少年が暴力的に遊んでいる映画を見せ、その後の子供たちの遊び行動を観察した。その結果、映画を見た子供は皆、模倣的暴力行動が増加し、社会経済的地位、及びモデルの年齢差による効果の違いを見いだすことはできなかった。

また、Slife ら (1982) は、暴力模倣過程における情緒的側面に注目し、ある暴力行為や道具の使用にあたっては心情的に好まれる方を模倣するという仮説をたて、小学1～2年生の64人(男32, 女32)を被験者とし、その実証を試みた。被験者は20秒にわたる19のビネット(半身の写真)が10秒のインターバルをはさんで10分間のビデオにおさめられたものを見た。最初の4つのビネットでは暴力に関係のないシーンが、残りの15のビネットには15種類のおもちゃの道具を使って、15種類の暴力行為をボボ人形に対して行なっているシーンが描かれている。被験者は、このビデオを見た後、ボボ人形やおもちゃが置いてある部屋に連れていかれ、彼らの遊び行動が観察された。その結果、Slife らの仮説は支持され、観察学習における、視聴者のテレビ暴力シーンに対する情緒的態度の役割が強調された。

(3) 脱感作理論

先に見たカタルシス理論、及び観察学習理論は、視聴者が暴力刺激にさらされた後に、暴力的行為が表われるかどうかを主に問題としてきたが、ここでは、これらの理論とは異なった視点から暴力番組を問題にしている脱感作理論について概観する。

a. 脱感作と条件づけ

我々はとかく物事に慣れてしまうものである。このことがうまく利用され

れば、ある事柄に熟練することになる。例えば、外科医を目指す学生は、何度も手術を見ることでその生々しさになれ、やがては自ら手術をしても拒否反応を起こすことはなくなる。この脱感作という現象は、神経症患者の治療に広く利用されており、Eysenck (1978) は、クモに対する恐怖症を例にあげてわかり易く説明しているので、以下に引用する。

クモに対する恐怖は条件づけられた情動反応である (略)。我々は今、条件刺激 (クモ) に対して弛緩という他の反応を条件付けたい。そうするために我々は、最も弱い恐怖を引き起こす状況——例えば、とても小さいクモを窓越しにかなり離れたところから見る——から、最も強い恐怖を引き起こす状況——例えば、ベッドに横たわっているとき、患者の身体の上をちょこちょこ横切っていく大きく毛深いクモ——までの、その患者にとっての恐怖の階層を構成することから始める。そのようなステップを用意した上で、我々は患者を完全に弛緩させ、先に設定した恐怖の階層の最下位の状況を彼女に想像させる。(略) このようにして、弛緩反応と恐怖の対象とを関連させ、クモに対する条件反応 (弛緩) を築き、彼女の症状の要因である条件づけられた恐怖を少しでもぬぐい去ることができるのである。

(p.49)

このように、「もし、マイナスのイメージを持つ物事が、プラスのイメージを持つ経験と関連づけられて何度も提示されると、もともとあったマイナスのイメージは徐々になくなっていく」(Bandura, 1969, p.424) のである。

条件づけによって暴力に脱感作されるということは、暴力と弛緩反応とを結びつけることを意味し、もしこのことがマスコミを通して行なわれるとしたら、その影響は無視できない。テレビで描写される暴力をくつろいだ気分で見ているうちに暴力と弛緩状態が結合したら、人々は、他人が行なう暴力であれ自分が行なう暴力であれ、暴力行為に対して嫌悪感を抱くどころか、それを平然と受け止めるようになってしまうからである。

b. 脱感作をめぐる諸研究

暴力番組が表現の自由との絡みでほとんど何の規制もなく放送されている現代社会において、視聴者が暴力に対し、脱感作状態を起こしていると考えても不思議ではない。岩男ら（1978）は日本のドラマ番組を分析し、1週間に怪我をした登場人物は727人、死んだ人は557人にのぼったと報告した。この報告に基づけば、人々は家庭というくつろいだ場所で、多くの傷害や殺人のシーンを見ていることになる。ちなみに、Gerbner（1972）は、1967年から1971年までの調査の結果、暴力のシーンがゴールデンタイム中、1時間につき7.5回の割合で描写されたことを報告し、このデータを基にすると、平均的なアメリカの子供たちは、14歳になるまでに11,000回以上の殺人を目撃することになると推定されている。このように頻繁に暴力を見ていれば、たとえそれが先に見た神経症治療のように段階的に提示されなくても、暴力に対する脱感作が起こらないとは言い切れない。

系統的な脱感作研究（例 Bandura, 1969 ; Wilson & Davison, 1971）は、多くの直接的、代理的暴力を経験することにより心理的鈍化が生じ、仮に暴力事件が起こったとしても、人々は通常感情反応を示さなくなるという仮説を示している。このことは、暴力刺激にさらされた子供の方が、そうでない子供より他の子供のケンカに対する反応が鈍化するという Drabmanら（1974）の実験結果によっても支持されよう。

一連の研究の中には、純粋な心理学実験の副産物として脱感作を支持する研究（Lazarus et al., 1962 ; Berger, 1962）もあるが、暴力に対する脱感作を主なテーマとした研究（Cline, et al., 1973 ; Drabman, et al., 1974 ; Thomas, et al., 1975 ; Thomas, et al., 1977）もあり、いずれも脱感作を支持する結果が得られている。また、心理学実験が多いため、脱感作の測定に関しては、実験者による観察よりは生理学的反応を基準とすることが多い。

Lazarus ら（1962）は、心理的ストレスを起こす手段としての映画の価値を実証するなどの目的で実験を行なった。Lazarus らは、大学生70名

(男35, 女35)にSUBINCISIONという、オーストラリア原住民の成人男子の陰茎を石で手術するシーンを含む17分間の血生臭い種族的儀式のサイレント映画を見せたところ、映画を見ている間に学生のGSR(皮膚電気抵抗)が次第に低下したことがわかった。しかし、この実験はそもそも暴力シーンに対する脱感作の検証を目的としたものではなかったため、この結果についての説明は行なわれなかった。この現象は、Berger(1962)の研究でさらにはっきり示された。Bergerは、個人の行動の決定要因としてのエンパシーやねたみ、サディズムを研究する上での概念的枠組みを構成するための基礎データを集めることを目的とし、実験を行なった。この実験では、実験協力者が電気ショックを受けるのを被験者は観察し、その間、被験者のGSRの割合が測定された。その結果、GSRの割合は13試行にわたって次第に下降し、脱感作が生じていることを裏づけるものとして解釈されている。

暴力シーンではないが、事故の場面の映画を使い、実験群45名、統制群23名の計68名の男子大学生を被験者として、Averillら(1972)は脱感作の過程を明らかにしようとした。実験刺激として、1)平削り盤で指を裂いてしまう、2)フライス盤で指を2本切断してしまう、3)丸のこで腹部を切り込まれてしまう、という3つのシーンから成る合計12分間の工場事故の映画が用いられた。この映画を視聴する前に、実験群には2番目のシーンが、統制群には、安全に関する講義のシーンが繰り返し見せられた。その結果、事故のシーンを前もって見ていると、後に映画全体を見た時、前もって見たシーンについてのみ情動的興奮が減少することがわかった。

Clineら(1973)は、テレビ視聴量と暴力シーンに対する脱感作の関係を明らかにするため、フィールド実験を行なった。被験者を、過去2年間に週25時間以上テレビを見ていた群と、週4時間しか見ていない群に分け、カークダグラスが出演するTHE CHAMPIONという映画から抜粋されたボクシング試合のシーンを含む14分間の映画を見せ、GSR及び血量脈拍を測定したところ、「テレビをあまり見ない」群よりも「テレビをよく見る」群の方が、情動的興奮が少ないことがわかった。

一方、Drabman ら (1974) は、GSRなどの生理学的反応ではなく、被験者の実際の行動を観察することによって、暴力に対する脱感作を調べようとした。小学3～4年生から成る44名の被験者（男22，女22）は、HOPALONG CASSIDYという、撃ちあいやケンカなどのシーンを含む西部劇を視聴する映画群と映画を見ない対照群とに分けられた。その後、被験者は2人の子供が別の部屋で遊んでいるのを観察し、何か起こったら知らせるように言われた。その結果、対照群では2人の子供の間に口論が始まったところで58%の子供が大人に知らせたのに対し、映画群ではわずか17%に留まった。Thomas ら (1975) は、この追試研究を行なった。この実験では、小学1年生40名（男20，女20）、小学3年生40名（男20，女20）、合計80名が被験者となり、MANNIXという探検物語から暴力シーンを抜粋したもの、または中性映画としての野球の試合を見せられた。その結果、小学3年生についてのみ、暴力番組を見た方が大人の助けを求めるのが有意に遅いことがわかった。

さらに Thomas ら (1977) は、被験者の生理学的反応を測定することによって、暴力番組視聴と実際の暴力に対する脱感作との関係を明らかにしようとした。Thomas らは、8～10才のこども44名（男28，女16）、大学生59名（男29，女30）をそれぞれ暴力映画群（11分間の刑事ドラマ番組からの抜粋を視聴）と中性映画群（バレーボール試合の番組を視聴）に分け、比較したところ、子供、大人の両者について、暴力映画群の方が、中性映画群よりもGSRで測定された感情反応が少ないことがわかった。

このように、脱感作が、日常のテレビ番組についても起こっていることが、上記の研究結果から十分予想される。その場合、「脱感作の効果とモデリングの効果が合わされば、個人の暴力傾向が増加したり、暴力の被害者に対して無関心になることが起こるとしても不思議ではない。」(Clile, 1973, p. 360)

(4) 文化化

本節では、暴力番組効果研究について、異なったアプローチを取り、いわ

ばテレビ暴力研究の新しい側面を切り開こうとしている Gerbner らの「文化指標プロジェクト (Cultural Indicators Project)」について概観する。

a. 過去におけるテレビ効果研究への批判

Gerbner らは、テレビ効果研究の捉え方が、態度変容などに係わるメディア研究に基礎を置いているため、マス・メディアの中でも特異な位置を占めるテレビには十分に適応できるものではないと述べている。そこで、彼らは他の(テレビ以外の)メディアに関する研究から派生したテレビ研究方法を批判し、テレビの特徴や機能を十分考慮したテレビ研究へのアプローチを発展させることを試みている。

まず、Gerbner (1976) らはテレビというものの位置づけから出発している。彼らは、「テレビは人々の態度や行動を変容させるものではなく、人々に社会様式などを浸透、定着させるという文化化の役割を持つ」(p.3) と述べている。

このようにテレビを位置づけた上で、人々はテレビの世界と現実の世界を混同することがあることを指摘し、テレビ視聴過多の人ほどこの傾向が強いことを示している。

b. 文化化をめぐる諸研究

テレビは人々の文化の源の1つであるという仮説を検証するために、Gerbner らはテレビ世界の実態を統計的に捉えることからはじめた。この研究は1967年から1968年までのテレビドラマにおける暴力分析を端緒とし (Gerbner, 1969)、それが結局1972年まで続き (Gerbner, 1972)、主に暴力番組の割合、番組中の暴力場面の量、登場人物の役割などが分析された。この結果に基づき、いわゆる「テレビの答え (television answer)」が作成され、テレビ視聴量の多い人(1日4時間以上)と少ない人(1日2時間以下)について、「テレビの答え」をする人の割合を調査した。「テレビの答え」とは、テレビの中の世界に関するその人の知覚である。つまり、暴力が頻繁に行なわれる番組を常に視聴していると、テレビの世界では、暴力は身近なものだという知覚を持つようになるが、やがて、それをそのままテレビを離れた現実世

界についてもあてはめてしまうようになる。そこで、例えば「あなたが暴力に巻き込まれる確率はどの位だと思いますか？」という質問をされた時、実際は1/100なのに、テレビ世界を反映する1/10という答えを選択した場合、その人は「テレビの答え」をしたということになる。

Gerbner ら (1976) は、1) 法律の執行に係わる仕事をしている人の割合、2) 人々に対する信頼度、3) 暴力に巻き込まれる率について「テレビの答え」をした人の割合を調べたところ、テレビ視聴量の多い人の方が多く「テレビの答え」をしているという結果を得ることができた。

このような結果をふまえ、Gerbner ら (1976) は、習慣化したテレビ暴力提示は、現実世界での暴力について過大評価された考えを人々に教化し、人々の危険感と不安感を増加させるかもしれないと指摘している。そして、もし人々が現実社会に対するゆがんだ認識を持つようになれば、人々はいっそう卑屈になり、力に対していっそう従順になるのではないかとし、こうして、暴力を受け入れ、不正に対し無抵抗になることは、人々が暴力的になるより大きな社会問題をもたらすかもしれないと警告している。

その1年後、Gerbner ら (1977) は、テレビ暴力が1977年には全体的に増加したことを報告した。その内訳の1つである、「登場人物が暴力に巻き込まれる割合」は1975年の65%に比べ、1977年には74.9%に達し、一方、「暴力を少しでも含む番組の割合」は、1975年の78.4%から89.1%に増加した。また、1976年に行なった「テレビの答え」研究について、性、年齢、教育の変数を統制し、再び調査した結果、やはりテレビ視聴量と「テレビの答え」は関連していることがわかった。

以上のように、2度の研究とも、テレビ視聴量と「テレビの答え」には一貫して有意な相関があることを示したが、Wober (1978) は、同様の研究をイギリスで行なった。彼は、もし Gerbner らの説が正しければ、アメリカと似た文化を持つイギリスでも同様の結果が得られるだろうと考えた。Wober は、1113人の16才以上の人を選び、身の回りの安全度、および人々への信頼度について調査した結果、テレビ視聴量に関係なく、ほとんど一様な答えを

していることが示され、Gerbner らの説は、イギリスにおいては支持されなかった。Wober は、この結果の解釈として、アメリカでは真であっても、イギリスでは真ではないかもしれないことをあげる一方で、Gerbner らのアメリカでの研究はそれほど説得力がなく、アメリカにもイギリスにも Gerbner らの言うようなテレビの影響はないかもしれないと述べている。

一方、Doob ら（1979）は、Gerbner らの追試研究をカナダのトロントで行なった。彼らは、暴力に巻き込まれるかも知れないという知覚の調査については、高・低犯罪地域の両方において為されるべきだとし、37項目に及ぶ質問を用意し、調査を行なった。その結果、テレビをよく視聴する人は身の回りに恐怖を感じているという結果が得られたが、実際の犯罪発生率などの要因を統制すると、相関がなくなってしまうことがわかった。このような結果をふまえ、Doob らは、「テレビは人々にとって情報源となるだろうが、人々の世の中に対する知覚に影響を及ぼすことはない。」(p.179) と結論づけている。

「テレビ暴力番組に多く接触すると、現実世界には、実際よりも多く暴力があふれていると認識するようになり、その結果、人々は社会に対し不安を抱くようになる」という Gerbner らの主張は、前節でみた脱感作理論（暴力に多くさらされると、それに慣れてしまうという理論）に反するということから Eysenck ら（1978）も、Gerbner らの説には疑問があるとしている。

このように、Gerbner らの説は、他の研究者の調査結果によって、現在のところ支持されていないが、彼らのプロジェクトはテレビ暴力研究に新しい視点を与えるものであり、また彼らの説も今後様々な変数をさらに統制することにより、支持される可能性もあると考えられる。

4 テレビ暴力研究の課題

以上、テレビ暴力が視聴者に影響を与えるプロセスに関する主な4つの理論をめぐる実証的研究を概観してきたが、すでに述べたように、カタルシ

スおよび文化化の理論を支持する研究は少ない。カタルシス効果は、ある種の暴力番組（例えば、まねのし易いボクシングやプロレスなど）に限って生じるのかもしれないが、総じて、単に暴力番組を視聴するだけで攻撃的感情が和らぐことはないように考えられる。

カタルシスと同様に、文化化の理論もあまり支持を得ていないが、この研究の基礎を成す一貫した内容分析は、テレビ暴力研究に大きく貢献している。また、テレビ世界と現実世界との混同については、年齢などの変数をさらに考慮した上での研究が必要であろう。

これらの理論に比べ、観察学習理論及び、脱感作理論は、過去の研究結果によって比較的支持されているが、逆に、説明できない点も多い。観察学習理論には、どのような状況において学習され易く、またどのように学習されたものがどのような状況で行動化されるのかなどの問題があり、これは人間の、複雑な学習や行動のメカニズムの解明という問題に他ならない。

一方、脱感作理論も実証的研究によって支持を受けているが、生理学的反応はあらわな行動とどのように関連しているのか、どれ程長く脱感作状態は続くのか、脱感作を起こし易い番組はあるのか、同一刺激以外には脱感作効果はないのかなど、問題は多い。

最後に、テレビ暴力研究全体を眺めてみると、暴力番組の類型化という問題が浮かび上がってくる。それぞれの理論に関する実証的研究を概観して明らかかなように、暴力刺激の内容はマンガ、ボクシング、西部劇など、様々であり、このように刺激が多様ならば、被験者の反応が多様であっても不思議ではない。そこで、テレビ暴力番組の類型化、及び類型別効果に関する研究が必要であると考えられる。Singer (1980) は、「暴力番組、めまぐるしい (rapid-cut) 内容の番組、出場者がヒステリックになるゲーム番組などに多く接している子供たちは暴力的になることを、我々が得たデータは示している」(p.301) と述べているが、これはテレビ暴力類型別効果研究の必要性を示唆するものとしてとらえられる。岩男ら (1978) は、日本の暴力番組について、マンガに代表されるランダム暴力、刑事ドラマに代表される目的的

暴力、及び時代劇に代表される苦悩的暴力の3つの類型化を試みている。このようなテレビ暴力番組類型別の効果研究は大変興味深いだが、類型化の基準が曖昧であり、当面は、十分な内容分析に基づいた類型化の基準設定に関する研究が必要であろう。

文 献

- Andison, F. S. (1977) TV violence and viewer aggression: A cumulation of study results, 1956 - 1976. *Public Opinion Quarterly*, 41, 314 - 31.
- Averill, J. R., Malmstrom, E. J., Koriat, A. and Lazarus, R. S. (1972). Habituation to complex emotional stimuli. *Journal of Abnormal Psychology*, 80, 20 - 8.
- Bandura, A., Ross, D. and Ross, S. A. (1961). Transmission of aggression through imitation of aggressive models. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 63, 575 - 82.
- Bandura, A., Ross, D. and Ross, S. A. (1963a). Imitation of film-mediated aggressive models. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 66, 3 - 11.
- Bandura, A., Ross, D. and Ross, S. A. (1963b). Vicarious reinforcement and imitative learning. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 67, 601 - 7.
- Bandura, A. and Walters, R. (1963). *Social Learning and Personality Development*. New York: Holt, Rinehart, & Winston.
- Bandura, A. (1965). Influence of models' reinforcement contingencies on the acquisition of imitative responses. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 589 - 95.
- Bandura, A. (1969). *Principles of Behavior Modification*. New York: Holt, Rinehart and Winston.

- Bandura, A. (1977). *Social Learning Theory*. New Jersey: Prentice-Hall.
- Bandura, A. (1973). *Aggression: A Social Learning Analysis*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall.
- パロン, R. A. 著 度會好一 訳 『人間と攻撃』 (ブリタニカ叢書, 1980)
- Belson, W. A. (1978). *Television Violence and the Adolescent Boy*. Farnborough: Teakfield.
- Berger, S. M. (1962). Conditioning through vicarious instigation. *Psychological Review*, 69, 450-66.
- Berkowitz, L. (1962). *Aggression: A social Psychological Analysis*. New York: McGraw-Hill.
- Bryant J. and Anderson D. (1983). *Children's Understanding of Television*. New York: Academic Press.
- Cline, V. B., Croft, R. G. and Courrier, S. (1973). Desensitization of children to television violence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 27, 360-5 .
- Comstock, G., Chaffee, S., Katzman, N., McCombs, M. and Roberts, D. (1978). *Television and Human Behavior*. New York: Columbia Univ. Press.
- DeFleur, M. L. and Ball-Rokeach, S. (1975). *Theories of Mass Communication* (3rd Edition). New York: Longman.
- Dollard, J., Doob, L. W., Miller, N. E., Mowrew, O. H., and Sears, R. R. (1939). *Frustration and Aggression*. New Haven Conn.: Yale Univ. Press.
- Doob, A. N. and Macdonald, G. E. (1979). Television viewing and fear of victimization: Is the relationship causal? *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 170-79.

- Drabman, R. S. and Thomas, M. H. (1974). Does media violence increase children's tolerance of real-life aggression? *Developmental Psychology*, 10, 418 - 21.
- Eron, R. D. and Huesmann L. R. (1980). Adolescent aggression and television. *Annals New York Academy of Sciences*, 347, 319 - 31.
- Eysenck, H. J. and Nias, D. K. B. (1978). *Sex, Violence and the Media*. London: Maurice Temple Smith.
- Feshbach, S.(1955). The drive-reducinng function of fantasy behavior. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 50, 3 - 11.
- Feshbach, S. (1961). The stimulating versus cathartic effects of a vicarious aggressive activity. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 63, 381-5.
- Feshbach, S. and Singer, R. D. (1971). *Television and Aggression: An Experimental Field Study*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Freedman, J. L. (1984). Effect of television violence on aggressiveness. *Psychological Bulletin*, 96, 227 - 46.
- Geen, R. G. (1978). Some effects of observing violence upon the behavior of the observer. In Maher, B.A. (Ed.), *Progress in Experimental Personality Research* (Vol.8). New York: Academic Press.
- Geen, R. G. and Berkowitz, L. (1967). Some conditions facilitating the occurrence of aggression after the observation of violence. *Journal of Personality*, 35, 666 - 76.
- Geen, R. G. and Quanty, M. B. (1977). The catharsis of aggression: An evaluation of a hypothesis. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology* (Vol.10). New York: Academic Press.
- Gerbner, G. (1969). Dimensions of violence in television drama.

- In *Mass Media and Violence* (Vol. 9). Washington DC: US Government Printing Office.
- Gerbner, G. (1972). Violence in television drama : Trends and Symbolic functions. In *Television and Social Behavior* (Vol.1). Washington, DC: US Government Printing Office.
- Gerbner, G. and Gross, L. (1976). Living with television: The violence profile. *Journal of Communication*, 26, 173 – 99.
- Gerbner, G., Gross, L., Eeley, M. F., Jackson-Beeck, M., Jeffries-Fox, S. and Signorelli, N. (1977). Television violence profile no 8 : the highlights. *Journal of Communication*, 27, 171 – 80.
- Gerbner, G., Gross, L., Jackson-Beeck, M., Jeffries-Fox, S., and Signorelli, N. (1978). Cultural indicators: Violence profile no.9. *Journal of Communication*, 28, 176 – 207.
- Gerbner, G., Gross, L., Morgan, M, and Signorielli, N. (1979). On Wober's "Televised Violence and Paranoid Perception: The View from Great Britain." *The Public Opinion Quarterly*, Spring, 123–4.
- Gerbner, G., Gross, L., Morgan, M. and Signorielli, N. (1980). The main streaming of America: Violence profile no.11. *Journal of Communication*, 30, 10–29.
- Goransen, R. (1969). The catharsis effect: Two opposing views. In Baker and Ball (Ed.), *Mass Media and Violence* (Vol. 9). Washington, DC: US Government Printing Office.
- Hanratty, M. A., O'Neal, E. and Sulzer, J. L. (1972). Effect of frustration upon imitation of aggression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 21, 30 – 4 .
- Hayes, S. C., Rincover, A., and Volosin, D. (1980). Variables

- influencing the Acquisition and maintenance of aggressive behavior: Modeling versus sensory reinforcement. *Journal of Abnormal Psychology*, 89, 254-62.
- Himmelweit, H. T., Oppenheim, A. N., and Vince, P. (1958) *Television and the Child: An Empirical Study of the Effect of Television on the Young*. London: Oxford Univ. Press.
- Howitt, D. and Cumberbatch, G. (1975). *Mass Media Violence and Society*. New York: Halstead.
- 岩男寿美子「“テレビ暴力”批判に物申す」(『Voice』 PHP研究所 10月号 1978年 87-100頁)
- Iwao, S., Pool, I. S. and Hagiwara, S. (1981). Japanese and U.S. media: Some crosscultural insights into TV violence. *Journal of Communication*, Spring.
- Kniveton, B. H. (1973). Social class and imitation of aggressive adult and peer models. *The Journal of Social Psychology*, 89, 311-12.
- Lazarus, R. S., Speisman, J. C., Mordkoff, A. M. and Davison, L. A. (1962). A laboratory study of psychological stress produced by a motion picture film. *Psychological Monographs*, 76 (Whole No. 553)
- Leifer, A. D. and Roberts, D. F. (1972). Children's responses to television violence. In *Television and Social Behavior* (Vol.2). Washington, DC: US Government Printing Office.
- Liebert, R. M. and Baron, R. A. (1972). Short-term effects of televised aggression on children's aggressive behavior. In *Television and Social Behavior* (Vol.2). Washington, DC: US Government Printing Office.
- Milavsky, J. R., Kessler, R. C., Stipp, H. H. (1982). *Televi-*

- sion and Aggression: A Panel Study*. New York: Academic Press.
- 無藤隆 「テレビが子どもに及ぼす影響——研究の現状と展望——」(『東京大学新聞学研究所紀要』 27号 1979年 87-130頁)
- 同上 「テレビと子供(1)」(『児童心理』 1月号 1981年 159-80頁)
- 同上 「テレビと子供(2)」(『児童心理』 2月号 1981年 156-83頁)
- 中西信男 『暴力の心理』(福村出版, 1970年)
- Parke, R. D., Berkowitz, L., Leyens, J. P., West, S. G. and Sebastian, R. J. (1977). Some effects of violent and nonviolent movies on the behavior of juvenile delinquents. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology* (Vol.10). New York: Academic Press.
- Pearl, D., Bouthilet, L., Lazar, J. (Eds.) (1982). *Television and Behavior: Ten Years of Scientific Progress and Implications for the Eighties* (Vol.1, 2). Washington, DC: US Government Printing Office.
- Philips, D. P. (1982) The impact of fictional television stories on U.S. adult fatalities: New evidence on the effect of the mass media on violence. *American Journal of Psychology*, 87, 1340 - 59.
- Savitsky, J. C., Rogers, R. W., Izard, C. E. and Liebert, R. M. (1971) Role of frustration and anger in the imitation of filmed aggression against a human victim. *Psychological Reports*, 29, 807 - 10.
- Siegel, A. E. (1956). Film-mediated fantasy aggression and strength of aggressive drive. *Child Development*, 27, 365 - 78.
- Singer D. G. and Singer J. L. (1980). Television viewing and aggressive behavior in preschool children: A field study. *Annals New York Academy of Sciences*, 347, 289 - 303.
- Slife, B. D. and Rychlak, J. F. (1982). Role of affective assess-

- ment in modeling aggressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 861–8.
- Stein, A. H. and Friedrich, L. K. (1972). Television content and young children's behavior. In *Television and Social Behavior* (Vol. 2). Washington, DC: US Government Printing Office.
- Stein, A. H. and Friedrich, L. K. (1975). The effects of television content on young children. In Pick, A. D. (Ed.), *Minnesota Symposia on Child Psychology* (Vol.9). Minneapolis: The University of Minnesota Press.
- Thomas, M. H. and Drabman, R. S. (1975). Toleration of real life aggression as a function of exposure to televised violence and age of subject. *Merrill-Palmer Quarterly*, 21, 227–32.
- Thomas, M. H. Horton, R. W. Lippincott, E. C. and Drabman, R. S. (1977). Desensitization to portrayals of real-life aggression as a function of exposure to television violence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 450–8.
- Wilson, G. T. and Davison, G. C. (1971). Processes of fear reduction in systematic desensitization: animal studies. *Psychological Bulletin*, 76, 1–14.
- Wober J. M. (1978) Televised violence and paranoid perception: The view from Great Britain. *Public Opinion Quarterly*, 42, 315–21.
- Wober, M. and Dannheisser, P. (1977). Does televised violence provoke paranoid perception? Gerbner's theory explored. *Bulletin of the British Psychological Society*, 30, 188–9.

A REVIEW OF EMPIRICAL STUDIES ON TELEVISION VIOLENCE

Teruyoshi Sasaki

In this review, the author defines television violence and presents the empirical studies pertaining to some processes hypothesized to account for the relation between viewing violence and subsequently behaving aggressively in order to 1) elicit a clearer understanding of the relation between viewing violence and behaving aggressively, and 2) give some suggestions for future studies.

In reference to some scholars' definitions, a violent television program was defined as:

“a single fictional story presented in dramatic form on TV such as a play produced for television, a feature film telecast, or a cartoon in which direct or indirect acts causing physiological or psychological damages toward living as well as nonliving things are portrayed.”

Based on the above definition of television violence, four major theories have been postulated to explain the process of how people are affected through viewing television violence:

- 1) *catharsis*, which posits that a vicarious participation in aggression reduces aggressive behavior
- 2) *observational learning*, by which aggressive behaviors depicted on television are learned and imitated by viewers
- 3) *desensitization*, through which people become used to violence, and are no longer upset or aroused by witnessing violence, and

- 4) *encultulation*, which assumes that a high exposure to television violence contributes to biased conceptions of social reality.

Among these theories, catharsis and encultulation are not supported by empirical data. Although, a study by Feshbach and Singer (1971) indicated that students' aggressive actions were reduced after viewing violent programs, their study has not been perceived as reliable because of methodological defects. While certain types of program material may function to reduce aggressive behavior, there is no data to indicate that watching aggression depicted on television reduces viewers' aggressive behaviors. The same thing applies to encultulation. While Gerbner et al. (1976, 1977), asserted that television is the central cultural arm of a society, indicating that a high exposure to television violence contributes to biased conceptions of social reality, findings of later studies (Wober, 1978; Doob et al., 1979) were contradictory to Gerbners' prediction.

On the other hand, the observational learning and the desensitization theories have been supported by empirical studies, even though there are several problems awaiting solution. The observational learning theory faces the problem of clarifying specific situations in which people learn easier and activate what they learn; in a word, it is a problem of clarifying complicated mechanisms of human learning and behavior. Desensitization theorists need to clarify, 1) the relationship between psycho-physiological responses and overt behavior, and 2) the long-term effect of desensitization. Furthermore, they should 3) specify those violent programs which are likely to cause desensitization, and 4) state whether desensitization to a specific stimulus can be generalized to other stimuli of the same class.

In general, an overview of studies on television violence brought out the fact that various kinds of violent stimuli were used in the studies such as comics, boxing matches, and westerns. This suggests the necessity of categorizing violent television programs. Certainly, one can assume that different types of programs would bear different effects. For example,

Iwao et al. (1978) identified three different types of violent Japanese television programs: random violence, purposive violence, and suffering violence programs. It is worthwhile to verify the effects of these different types of programs. However, a basis for classification does not exist yet. Thus, an establishment of a standard for classification of violent programs based on thorough content analysis is urgent.